

## 診療所だより

### 心

マニラ日本人会付属診療所 菊地 宏久

皆さん、星野富弘画伯をご存知ですか。詩人としても有名な方です。世界中が新型コロナウイルス感染症の蔓延に直面している時、富弘さんの詩は我々に、生きる力、優しさ、そして希望を与えてくれます。

群馬県にある星野富弘美術館をずいぶん前に妻と訪問しました。富弘さんは1946年、群馬県に生まれ、群馬大学卒業後、中学校の体育教諭になります。しかしクラブ活動（器械体操）の指導中に頭部から転落し頸髄損傷を負ってしまいました。（星野富弘美術館資料より）

わたしたちの多くは、いつでも動く手があり、その手で文字や絵を描くことが当たり前のことと思いがちです。

しかし富弘さんは突然に手と足が全く動かない病態になってしまいました。お母さん、家族、人々に支えられながら、病床上で口に筆をくわえ、必死に一つの点を、一本の線を描くことから努力されたそうです。

ここで、富弘さんの一つの詩をご紹介します。

「なずな」

星野 富弘

神様が たった一度だけ  
この腕を 動かして くださるとしたら  
母の肩をたたかせてもらおう  
風に揺れる  
ペンペン草の実を見ていたら  
そんな日が  
本当にくるような気がした

(「四季抄 風の旅」星野富弘、1985 年第 5 刷より)

富弘さんの本には、これらの詩が美しい花の絵とともに、わたしたちに語りかけてきます。

フィリピンのみなさん、日本のみなさん、世界中のみなさん、そして星野富弘さん、くれぐれもお身体を大切になさってください。